続 徒然 つれづれ

議員・医者・記者

桑野　巍

「戦後の大阪発展のピークは？」と聞かれれば「昭和45年の大阪万博のころ」と答える。行政も経済界も万博成功のためのアクセルを踏み、ブレーキを忘れていた。いまもあのころの記者連中と会うと「あのころは楽しかったよなあ」が合言葉だが、これはいまや禁句で若者に失礼、しかも大昔のことで記憶は薄いから。

万博が開かれる前のある時、大阪府議会議員の各党幹部と府政記者数人が懇談した。ビールで乾杯のあとがやがやが続いたが、ある議員が「何とかならぬか万国博」と発言、記者の一人が「どんな意味か。いま大阪から万博を抜きにしたらどうする」と反論した。そして「あなたは無責任、村会議員か」と見下げた。地方議員を侮辱してはならないのにと思ったら、この府議はすかさず「君らはトロッコだ」と応酬した。汽車（記者）の超小型がトロッコ、この例えにその場は大笑いになったが記者側の反論は出てこなかった。

トロッコかどうかは別にして、古手の野党議員は「マスコミが万博をあおり立てるのはよくない。もっと冷静に」という発言、マスコミ批判も始めた。記者連中は議員の日ごろの腹いせと受け止めた。当時の記者は自惚れも強かったが、忍耐力も持ち合わせていた。当時千里の万博用地買収に手間どっていた微妙な時代なのに、この懇談の場では本論に触れることなく雑談の域を出なかった。

その雑談の中でベテラン記者の一人が「職業に貴賤はないが」と前置きして「五者というのがあるが議員は入ってないんだよなあ。五者とは医者、役者、芸者、易者、記者」と発言、続けて「議員、役人は医者、弁護士、記者、金融マンと昵懇（じっこん）にすれば出世するとか」とつけ加えた。彼のもの知り度の披露だったが、なぜかその場は意に反して白け状態になってしまいビールがほろ苦かった。

医者という話が出たことを思い出したので前述の昔話を面白く書面にしたため、高校同級生の医師（徳島市在住・大学名誉教授）に伝えたら彼から返事がきた。順不同であっても職業を評論するのはよくないし医師が偉いわけではなくて「自分の仕事が誰かの役に立っているのかどうか。自身の意識が大事ではないか」と真面目に書き、彼の近況を知らせてくれた。

彼はいま民間病院の名誉院長でありながら週３日現場で診察に当たるなど地域医療に余念がない。徳島県が糖尿病死亡率全国第一位を続けているところから、県医師会の糖尿病対策推進協議会に属し悪戦苦闘中という。かつて日本糖尿病学会の会長として活躍した実績のある彼はこの病気の恐ろしさを県民に知ってもらうことと実際のアクションとして、プラス1000歩県民運動を発案し、身体的な活動週間を身につけるよう呼びかけているそうだ。

私事としては最近不運にも夫人が体調を崩しかけたせいで厨房入り、古稀が過ぎて料理書を買求し、自作料理に取り組んでいるという。レシピ通りに調理した作品が料亭のあら煮（だ）きに見間違えるばかりの出来ばえに驚き、いま料理にはまり込んでしまったそうだ。お陰で食の深さ、楽しさがわかりかけて新鮮な驚きの連続で「人生も新たな展開、いくつになっても人生は未知の連続」と結んでいた。

もう一人の医師は東京在住の耳鼻咽喉科の女医。彼女は高校の２年後輩で新聞部に属し当時から茶目っ気があった。夫君は医大の同級生、卒業後２人で医院を開業し地域医療に貢献していた。ところが今年３月で医院を閉鎖した。彼女は若いころから70歳ぐらいまでは医師として頑張ろうと考えていたから、医院閉鎖に悔いはないという。10年ばかり務めた日本女医学会の役員も退任することにしているが、まずはわが身の骨休めをと夫君と２週間のポルトガル旅行を楽しんだというから羨ましい。

女医学会は全国的な組織で、最盛期には会員数5,000人だったが現在は2,000人足らずに減少、今さら女性だけで集まらなくてもと考えている女医が多いらしい。彼女は「医師はこれまで尊敬されてきたし、経済的にも恵まれたが偉くはない」といい、「この先少子高齢化で医師を取り巻く環境が変化しそう。それにしても医院閉鎖は面倒だった」と書いていた。２人の医師からの手紙の共通の結びの言葉は「お互い健康留意」だった。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）